人間文化創成科学論叢　第22巻　2019年

昭和20年代の保育者のキャリア形成に関する一考察
―藤野敬子と吉村真理子のライフストーリーを元に―

永　倉　みゆき*

A Study on Career Formation of Childcare Practitioners in the Post War Era:
Based on the life stories of contemporaries, Keiko Fujino and Mariko Yoshimura

NAGAKURA Miyuki

Abstract

This study considers two aspects: Firstly, what kind of childcare the practitioners of early childhood care and education created in the post-war chaos, and Secondly, how they built a career. This was clarified by investigating the stories of two women who became childcare practitioners during the post-war growth period and then became leaders. Both became childcare practitioners by chance but continued to study at the place where they were placed in the wake of the post-war reconstruction of education. The two women stood out because they consistently "insisted on their own thoughts" and therefore, their coworkers worked around them. The common characteristic of these two women is that they stuck to their beliefs. They were greatly influenced by teachers who resisted the oppression of Christianity during the war. This attitude, acquired when they were in high school, became the foundation of their lives and eventually led to the creation of childcare.

Keywords：life stories, childcare practitioner in the post war era,
childcare creation, career formation, belief

1．はじめに

近年、国際的にも乳幼児期の教育の重要度が認知されるようになり、保育の質向上が叫ばれている。保育の質向上に欠かせない保育者の専門性とは何かについては、これまで様々な議論があった。神長（2015）は、保育者の専門性の要素として「理論的専門性」「実践的専門性」「反省的専門性」「関係構築的専門性」の４点があるとし、更にこれらを身に付けていくためには、資格等は必要十分条件にすぎず「自ら学ぶ姿勢をもって研鑽を重ね、その専門性を磨くことにより専門職としての地位を獲得することができる」[1]としている。では戦後の混乱期、保育者の養成課程はおろか資格制度も十分に確立していなかった時代に保育の仕事に就いた保育者たちは、どのように保育を創造し、キャリアを形成してきたのだろうか。このことについて、戦後の高度成長期に保育者となり、その後保育界に影響を及ぼした２人の女性のライフストーリーを追うことにより明らかにしたい。

キーワード：ライフストーリー、昭和20年代の保育者、保育創造、キャリア形成、信念

＊平成28年度生　人間発達科学専攻

2．研究方法と研究対象

2-1　研究対象者のライフストーリーを取り上げる意味

ライフストーリーの上位概念であるライフヒストリーは、小学校教師の力量形成に関する研究方法として多く使われている手法である。教師の人生に関するデータを教師研究の重要な要素であるとしたのはカリキュラム研究で著名なアイヴァ―・グッドソンであった。グッドソン（2006）は「教師の仕事とライフヒストリーが教育研究と教師の専門的な成長を再概念化する上での中心となる」[2]と述べているが、近年では寧ろライフストーリーを用いた研究が多くみられるようになってきた。やまだ（2000）は、個人の生活史の再構成がライフヒストリーの目的であるとした上で、Mann,S.Jの見解を引用し、ライフストーリーは生きられた人生の経験的真実を表そうとするものだとする[3]。同様に桜井（2012）は、ライフヒストリー研究が、オーラル資料のほかに自伝、日記、手紙などの個人的記録を資料源として利用し、時系列的に「事実」を構成していくものであるのに対し、ライフストーリーは、個人が聞き手とのコミュニケーション過程をとおして過去の自分の人生や自己経験の意味を伝える語りであり、「いま、ここ」に於いて聞き手との相互行為から生まれる語りであるとする[4]。このことから、今回の本研究の目的は、インタビュアーとの対話を通して対象者が過去を振り返る語りから、ある時代の中での保育者としての成長を描き出すものであるため、ライフストーリーを用いて研究を進めることとする。（下線は筆者）

2-2　研究対象の概要

藤野敬子（1926－2017）と吉村真理子（1927－）の２人は、保育者として勤めた後、どちらも園長や保育者養成校の指導者となり、実践的な保育研究の発展に貢献してきた人物である。２人ともある時期保育界を牽引したという意味から高い専門性を持つ人物であると言える。藤野敬子は､1926（大正15）年に広島県福山市に生まれ、愛媛県松山市で育つ。松山東雲高等女学校の英語科を卒業後補習科保育で１年学び勝山幼稚園に勤めるが、戦争で園も実家も焼失したことから結婚した姉が住む静岡に移り住み、静岡第一師範学校附属幼稚園（1951（昭和26）年４月１日より静岡大学教育学部附属幼稚園と改称：以下静大附属幼稚園と記載する）に姉の後を継ぐ形で勤め始める。1949（昭和24）年に教育職員免許法が制定されたことから、働きながら幼稚園教員認定講習を受講し、幼稚園教員免許を取得する。その後、同園に30年余に亘り勤め、退職後は東洋英和幼稚園園長となった。その間、昭和42年に幼稚園教育指導書協力者（言語編）、平成元年の幼稚園教育要領改訂時には、昭和59年より調査協力委員（環境）を務めるなど、昭和から平成にかけて幼稚園教育の発展に尽力した。もう一人の吉村真理子は、1927（昭和２）年に愛媛県松山市に生まれ育ち、藤野とほぼ同時期に松山東雲高等女学校英語科を卒業するが、藤野同様空襲により家族と共に愛媛県喜多郡大洲町の親戚の家に身を寄せ、地元に作られた新制中学校の音楽教師となる。その後桜美林中・高等学校で音楽の教師を務めた後、保母資格を取得し、東京都立保育所の保母となる。主任・園長になった後、松山東雲短期大学で教鞭をとり、退職後の現在も数多くの講演や研修を通して、保育現場の資質向上に尽力している。戦後の教育制度が変わるという特殊な時期に、２人は保育者養成施設で資格を取得することなく保育の道に入り、にもかかわらずそれぞれの分野でのリーダーとなり、保育界に大きく貢献した。この２人の保育者としての成長、円熟の道筋を分析することで、保育の専門性を養成するのに必要な要素が明らかになると考えられる。

3．昭和20年代の保育職の実態

3-1　保育者の資格とその養成

昭和初期の保育者の資格については、大正15年に勅令として出された幼稚園令の中に「第九条　保姆ハ幼児ノ保育ヲ掌ル　保姆ハ女子ニシテ保姆免許状ヲ有スル者タルヘシ」と示されているものの第十条には「特別ノ事情アルトキハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ保姆免許状ヲ有セサル女子ヲ以テ保姆ニ代用スルコトヲ得」とされており、幼稚園令施行規則第十条においては保母の無試験検定を受ける資格について①小学校の本科正教員の免許状を有

するもの　②高等女学校を卒業したるもの又は専門学校入学者検定規程により試験検定に合格したる者は一般の専門学校入学に関し無試験検定を受くる資格を有する者にして其の合格又は卒業後１年以上幼稚園に於て幼児の保育に従事したる者（以下③④⑤は略）とあることから、この時代は小学校の免許を持っているか、高等女学校等を卒業し１年以上の保育経験があれば幼稚園保姆として働くことが可能であったことがわかる。 宮内は、

「このような保母資格の基準はまさに幼児教育の独自性と専門性の軽視であり、否定である」[5]との見方を示しているが、幼稚園令施行当時の幼稚園数1,066園、園児数94,421人（大正15年）に対し、保育者養成施設は官公立のものとして３校、その他一時的なものも含めて13校のみであり、その数は圧倒的に不足していたという実情もあった[6]。２人が保育者になった昭和20年代の日本の保育者養成の実態はといえば、幼稚園の教職員は昭和22年学校教育法により保姆から教員という小・中学校の教員と同等資格のものとなったとはいえ、幼稚園教員の養成校は官立としては東京女子高等師範学校と奈良女子高等師範学校に附設された１年制の保育実習科あるいは保姆養成科があるのみ、後は私立の保姆養成所が全国に21か所という状況で、しかもそれは首都圏に集中しており[7]、２人の出身地である愛媛県には養成施設がなかった。保育者の専門性という認識がまだ確立していないことにも一因はあったが、養成機関の不足と保育人材の需要の増加という現実的な事情から、首都圏出身者以外の者の多くは、保育者になることを目指して保育者養成課程に学び資格を取るという、現在のような過程ではない形で職に就いていたことがうかがわれる。

3-2　保育者の職業意識

厚生省児童局保育課にいた副島ハマによる保育者の意識調査の結果が1949（昭和24）年の雑誌『保育』に載っている[8]。これは副島が保母の資格認定講習会開催時に講習生に対して行った事態調査によるものであり、様々な県の調査の中で高知、長野、岡山、群馬、東京の５都県の結果がそこに載っている。調査対象者の総数は608であり、幼稚園保母と保育所保母が混在している点など統計として正確であるとは言えないが、ある傾向がそこから見えてくる。例えば「保母になる前にしていたこと」の項目では、小学校教員６％、事務員16％に比べ、学生が30％、家事手伝い主婦その他が38％（高知と東京の平均）と倍近くを占めていることから、昭和20年代半ばでは、新卒者と家庭にいた婦人が多く保育職として働いていた実態がわかる。副島は「戦争によって一時保育所が閉鎖されたことや、自分自身が疎開していたことや、又戦争による未亡人達や、生活のために働く婦人達が子供を抱えて働くに適した仕事として保母を選ばれたであろう」と考察する。「出身学校」の項目では、高等女学校が49％と最も多く、次いで保母養成所１ヶ年が39％となっている。（長野、岡山、群馬、東京の平均）しかし、その内訳を見ると、保母養成所出身者では東京が39％と突出しており、これについて副島は、前項で述べたように保母養成所が東京に集中していた結果ではないかと推察する。また「保母になった動機」の項目については、岡山、群馬、東京の３都県を比較しているが、岡山、群馬では、「特に子供が好き」が40％、42％と半数近いことに比べ、東京は14％と低く、逆に「社会事業に対する使命感」という点では東京が14％と他の２県の倍になっている。一方で岡山のみ27％の者が「小児教育の重要性を思う」と答えており、これについて副島は、これは地域による差というよりも、岡山県は調査対象者のうち幼稚園勤務の者の割合が44％と最も高く、反対に東京都は保育所勤務者が53％と最多で、後の47％は養護施設等の収容施設勤務者で幼稚園勤務者は０という対象者の勤務先による差ではないかと考えている。この時代には、保育者養成所出身で保育について学んだ者は東京都であっても４割程度であり、地方では更に少なく、保育者になるまでの履歴は様々であった。また子どもが好きという理由以外にも、社会貢献への使命感に基づいて保育という職業や勤務先を選び就職していたことから、高等女学校を卒業し就職を考えた際に、人を育てる仕事としての保育職は自身の教養も活かせるやりがいの持てる仕事として選ばれたと考えられる。

４．２人のライフストーリーから見える保育者としての成長過程

次に２人の語りから、保育者としての成長過程の中に、どのような専門性を高める契機があったかを明らかにする。２人の語りのうち保育の専門性育成に関わると感じられた「女学校時代の学び」「キリスト教弾圧との対峙」「職場の同僚の影響」「自主的な学び」の４点について抽出する。インタビューはいずれも常葉大学短期大学部鈴

木久美子と共に行っており、藤野には、藤野の自宅で2009年６月６日、７月４日、８月14日、９月７日に各日３時間程度、吉村には、松山東雲女子大学、松山山越教会等で2019年の８月26日から28日の３日間に亘り各日３時間程度聞き取りを行い、話をテープレコーダーで録音したものを資料としており、両者からは論文掲載の許諾を得ている。本文中の藤野の言葉はF、吉村の言葉はYと表示し、N、Sはインタビュアーを指す。

4-1　女学校時代の学び

藤野も吉村も共に松山東雲高等女学校での生徒を一人の人として尊重した校風や、自由感あふれる学び方に影響を受けている。

Ｆ：そもそもミッションスクールのホイテ先生っていうのが、とても建築に造詣が深くって。校舎なんですけど、日本の白壁とね、銀鼠の瓦屋根の校舎なんです、日本建築の良さを生かした。…受験に行ったら、たたずまいがあんまり違うんで、きょろきょろきょろきょろしていたんですね。…その女学校の建物が違うっていうことが影響していると思うんですね。そういう、いろいろ育てられた中で、保育要領とかで感化を得たのが、こういう（静大附属幼稚園の）園舎を建てた元にあって、私が全部工夫したわけじゃなくて、そういうのを受け継いだんだと思うんですよね。

藤野は、入試の際に初めて出会った、城郭を模してつくられたという威厳ある校舎の雰

囲気に圧倒されつつ心惹かれた。藤野が“たたずまい”と表現している、実用一辺倒でない、存在感のある空間のつくり方はその後自園の「環境」を考える際に影響を与えたと述懐する。また、生徒への教授法にも新鮮さを感じている。

Ｆ：学校の違いっていうか、教師が君臨してて、生徒が下にあるじゃなくて、教師も生徒もみんな一緒に膝まづいているというミッションスクールは全然違ってたので、そこでびっくりしたんですけれどね。今でも考えると、あの女学校のユニークな教育がふっと私の保育のいろんな時、土台になっているんですね。選択科目っていうのが割合たくさんあって、自由で選べるってことがあった。選べるってことの楽しさもその時に教わったの。それと、自習時間っていうのがあるんですけど、その時に体の弱い人は体育館のバルコニーで日光浴するんですよ。日光浴する洋服っていうのがあって、それに着替えて、日光浴する時間があったりと、とにかくその人の個性や能力に合わせて、必要なコースを様々に多様に提供してくださるっていうのがひとつあったんですね。…幼稚園で、子どもが選ぶこととか、そういうのが好きになったのは、やっぱりそういうのを（それまで）こちらが受け身でしていた時に、経験したことが大きいと思うんですね。たとえば遠足ですと、行きは全校生徒が揃って行くんです、目的地まで。でも帰りは違うんです。私の女学校は、松山に行くとおわかりになるんですけど、松山市にお城山っていうのが真ん中にありまして、そのお城山の中腹にミッションスクールがあったんですね。…で、帰りはね、パーっと自由に放されて、自分で好きな道を選んで、とにかく３時までは学校に帰り着くように、ただし、一人になってはいけないっていうだけで、ぱっと放されるんですよ。どっちの道に行こうか、こっちの方がよさそうだね、あ、誰か先客があった、あ、こっち行こう、迷いそうになると、ふーっとお城山を見ると、方角だけは合ってるわけですから。それでいろいろ自分たちで思って、無事にたどり着くの。それも面白かったんですね。だから、選んで、自分で各自考えてするってことの楽しさを、女学校の時に私は教わったのが、やっぱり保育者として強かったんじゃないかなと思うんですよね。

教師が方向を示して教え育てる教育ではなく、自ら方向を決め、それに応じて必要な学びをする教育方法である。当時、教師が生徒より上位者であることが当たり前であった日本の公立の小学校で学んだ藤野は、生徒も教員も神の下では皆平等であるという関係性にまず驚く。そして、「自らの学びを自らが選ぶ」という自覚的な学びを促す教育方法に感銘を受けるのである。藤野自ら述べているように、これらの体験はその後の藤野の保育観に密接に結び付いていく。

一方、吉村は「学ぶ」ということの真の意味を初めて理解した体験を次のように語る。

Ｙ：小学校から東雲に入った時に、「あ、上級学校にはいったっていうことは、こういうことをすることなんだ」って思った出来事があってね、３つあったんですよ。印象に残っているのはね、物理の先生。…その方の科学の授業が面白くて「あ、こんなに物事を科学するっていうことは面白いことなんだ」っていうのを、階段

教室の真ん中辺で、先生の実験やら説明の仕方なんかで「あ、物をこういう目で見るんだ」っていうことに感激しながら見ていたんですよ。

Ｙ：それから数学の時間にね、「算術と数学の違い」っていうものを知って。…一番初めに驚いたのがね、先生が前にいる学生に「黒板に線を一本描いてください」って言ったらその人が線を描いたんですね。そうしたら「これは２本の線ですよ」って。先生がおっしゃって…どんなに細くても境目っていう線っていうものは幅のないものであって…だからこれは２本の線ですよっていう。…もうね、画期的だって思ったんですよ、私は。「算術ではこういうことはない」って。

Ｙ：もう一人は、博物の先生で …「試験問題を今から黒板に書くからその中から出すから勉強しときなさい」っておっしゃる。で、50問ですよ、50問。私たちは必死でそれを写してね、だけど、全然習ってないことがいっぱいあるわけ。教えてないのに。…そしたら「分類学」の、植物の分類を…それって植物学をする上で基本になりますよね、そういう問題を、教えもしないのに、勉強する人は自分でやるっていう。ですから、小学校と一つ上の段階に行くと、「ああ、これが学問だ」っていう。

この３人の教師のエピソードからは、教えられたことを覚えるだけの勉強ではなく、物を科学する姿勢、常識を疑い本質を見ようとする姿勢、自ら調べる姿勢、など生きていく上で必要な考える方法を教えられ「これが学問なんだ」と喜びに感嘆する姿が伝わってくる。男性中心の社会であった当時、高等女学校は、良き家庭婦人としての技芸教養の習得の場として設置されるという位置付けだったが、真摯に学問の仕方を教えようとする力量ある教師の存在により、真の学びに開眼する吉村のような生徒もいたのである。

4-2　キリスト教弾圧との対峙

戦争時のキリスト教の弾圧とそれへの抵抗についての話は、２人の語りの中で大きな部分を占めていた。

Ｆ：ホイテ先生っていう先生も、なかなか骨のあるいい先生でしたね。…連合司令部の兵隊さんの所に勤労奉仕に行く時もホイテ先生真っ先に先頭に立ってね。やっぱりそういう時に後ろ指を指されないようにミッションスクールは戦争に反対してるって思われないように、一生懸命勤労奉仕に、真っ先に行ってね。

Ｆ：松山の佐藤牧師っていう人が偉い人でね。とっても。日曜学校、教会にね、戦争中だから「靖国神社」に参拝しろって話がくるわけですよ。それをみんなで相談したけど、佐藤牧師だけは絶対に行きたくないって言ってね。そういうの貫いたんですよ。あの時は大変だったんですよね、キリスト教は、弾劾があって。…佐藤牧師は地味な人だったけど、軍部に反対して、靖国神社参拝なんかもとうとう行かなかったんですよね。…骨のある先生だったから。戦争中になびかない人なんて少ないですよね。戦後はキリスト教は華やかになりましたけど、一番弾劾されている時のキリスト教でしたからね。でもそれを守り抜いて。…（藤野自身が）昭和15年にクリスチャンになって（戦争終結まで）あと５年間は非国民って言われてね。

藤野は、普段尊敬しているホイテ校長が、先頭に立って勤労奉仕に行く姿を見て、そこに学校を守るためになら自身の信念に反することでも率先してやる、という“骨のある”理想のリーダー像、或いは教師像を見いだしている。もう一人藤野が骨のある人と呼ぶのは、佐藤牧師である。佐藤牧師は身の危険も顧みず、非国民となじられることを甘んじて受けながらも、自身の信念を曲げずに行動で表した。２人の信念の守り方は相反しているようにも見えるが、己を投げ打って大切なものを守るという意味合いに於いては等しい。若い藤野は、信念に基づき私心を捨てて生きる姿勢を身近な人物から示される体験をした。

吉村もまた、戦時中に大人により生きる姿勢を示された体験を次のように語る。

Ｙ：終戦の１年前くらいでしょうかね、私のオルガンの先生で東雲の歴史に残っている青野光江先生っていう方がね…その普段おしとやかな先生がね、風呂敷包みか何かを抱えてきて、グラウンドの真ん中に。夏の真昼。その風呂敷から何を出したかって言うと大きな洋楽のね、レコードなんですよ。宗教音楽のレコードなんですよ。たくさんあったんですけど、そこに出して、全部ぶちまけたんですよ。グラウンドの真ん中に。…（魚木梅子先生と２人で）そのレコードを踏みつけたんですよ。普段あの先生たちがそういう行動をするのを見たことがないんです私はね。下駄でレコードを踏みつけるなんて。しかも、校舎に囲まれたグラウンドの真ん中で、何も言わずにね、…本当に悔しそうに踏みつけたんですよ。ショックだったですよ、私は。それを見て。こんな馬鹿なことを軍の命令でね、敵性国家の音楽は一切まかりならん、ということに対する

馬鹿馬鹿しさっていうのをね、一言もおっしゃらずに皆の見えるところでそれをやったの。…で、私は「抵抗する」っていうことを**しっかりと**、正面切って抵抗するんじゃなくて、そういうことを**しっかりと**伝えていくことが大事なんだなって思ったんですよ。（太字の所は強調して話された）

Ｙ：英語の受験のいる学校へ行きたい人は県知事の特別な許可を得て、英語を習ったんですよ。…矢野三郎っていうその方が、…お若い時に３人のために授業をしてくれて、選んでくれた本が美術の本だったんですよ。…アメリカで作った立派な紙の、素晴らしい一冊の美術書をみんなに１冊ずつくださったんですね。そこには、ミケランジェロとかダ・ヴィンチとかラファエロとかが描いた宗教画から題目を取っていたような、そこでその方が、宗教画の解説とかいろいろなものが書いてある本を英語で習ったんです。「ああ、伝えたいものはこういう方法で伝えるんだ」と思って。それで軍の命令の愚かさみたいなものをね、どうやって伝えるかっていうことのプロテスタントですけれども、するわけですね。…それがもう、本当に強く印象に残っていてね

同じ反骨精神でも吉村は、２種類の違った抵抗の仕方と出会う。青野先生たちは、真夏の運動場で、大切にしていた宗教音楽のレコードをぶちまけて踏みつけるという行為を通して生徒たちに戦争の愚かさを伝えようとした。吉村はこのことにショックを受けながらも「伝えるべきことはしっかり伝えなければいけない」ことを胸に刻む。もう一人の矢野先生の抵抗の方法はまた違っていた。禁止されている敵性語の英語の学習にアメリカ製の美術書を使い、美術を教えるという名目で実は英語を教えるという抵抗（プロテスト）の仕方である。正面切って対決するのでなく頭を使って切り抜けるのを見て「ああ、伝えたいものはこうやって伝えるんだ」と抵抗なき抵抗の術があることを知る。

このように藤野も吉村も、キリスト教系の学校であったことから、戦争の中で抵抗する教師の様々な姿を目の当たりにして「信念の守り方」や「主張の方法」について深く感得することになるのである。

4-3　職場の同僚の影響

藤野と吉村の所属した職場の環境は、ある意味で対照的であった。藤野は、師範学校の附属幼稚園という性質上、静岡県女子師範学校出身で小学校から異動して来た教師たちが常に同僚の中にいた。小学校出身の教師が皆幼児教育に理解がないわけではなく「小学校でも面白い先生もいるんだけど、たまたまかたーい先生が来た時に苦労したって感じ」と語ってはいるが、『昭和32年教育課程』作成時のメンバーとはことごとく対立したという。

Ｆ：やっぱり、教師の通りに子どもを動かそうとするんでしょうかね。子どもの持っている良さを引き伸ばすんじゃなくて、教師の思うままに子どもをしつけていこうというタイプだと合わなかったんだと思います。子どものものを引き出そうっていう人だと方法は違っても、根本的な姿勢がそこにあれば、少々細かいところは違ってもいいわけですよね。…小学校から来た先生にとっては教育は主活動。自由遊びはだめで、で、それをやらされてた。…その頃は、私一人幼稚園でしょ。なかなかわからなくてね。

この対立が何年か続いた後、経済的な事情が許したこともあり、36歳の時に藤野は大学に入学するという形で一度職を離れる。

Ｆ：行くきっかけ？ 13年10ヵ月勤めて…附属幼稚園は国立だし、いろいろ行き詰るとこがあってね、だからいっぺん勉強してきたいと思ったんです。それで元々行きたかった自由学園は行きそこなったけど、今度はICUにどうしても行ってみたいと思って。

一方吉村が、保育者として最初に勤めた東京都の公立園は次のような状況であった。

Ｙ：園長さんは、戦災者の、ていうかご主人が亡くなって未亡人…主任と、もう一人の方はね、もう50を過ぎていたかと思うんですが、未亡人の方がいらしたんです。それで私と３人なんで。で、その未亡人の方も資格がなかったんでしょう、勤めながら資格をお取りになったと思いますよ。主任の人はね、保育じゃなくって、大学を出て他のことを出てらっしゃるんだけれども、戦後すぐでしたからね、資格やなんかはないけど、大学を出ている人をね。で、その人がわりと明るくて、子どものことが好きで、まあ、ある程度は（オルガンも）弾ける。体力も。お話も上手。で、昔の幼稚園の先生が持っているような能力を持っている方。で、私がそこでお手本にするのはその人しかないわけですよね。…私は最初は、真ん中のクラスをね、持って、主任の先生が年長を持って。その方のやるようなことをすればいいんだっていうことで。それ以外頼るもの

はないんですからね。初日に行ったら何時に何をするっていうのをメモしなきゃならないですよね。それを上手にメモをして…。

Ｙ：（異動先の公立園である）町田もね、園長以下３人だった。町田の園長は、役場の課長だったんです。で、町田の主任は、奈良の女高師を出た方でね。…国文科か何かかと思います。…その人はちゃんとした人だったのでね、書類もあるし、指導計画も作るし、そのような普通の保育園の形態が、そこで、ありましてね。…主任の次の方が、私と仲のいい友達になったんですけど。その方が相模女子大の保育科を出た人だったんですよ。そこで、保育の専門家に初めて出会った。

吉村の勤めた園の同僚は、人柄はよく家庭も豊かではあるが、戦争の未亡人ということで働いている一般の婦人であった。吉村もまた中学校の音楽の教師から初めて勤める保育所である。そこで吉村は隣のクラスの明るい主任の保育を観察して取り入れる。その園の次に異動した先もまた、主任は師範学校を出ていて指導計画等の形式としての園の形は整えるのだが、保育のことは分からない。もう一人の同僚のみが保育を専門として学んだ人であったと言う。吉村が常々「保育は自分で作るもの」と後進たちに語る背景にはこのような自身の経験があったのである。

4-4　自主的な学び

藤野は勤めた園が附属園という研究園であったことから様々な研究に取り組むが、自身の自主的、自覚的な学びについては次のように語っている。

Ｆ：本当は自由学園に行きたかったの。合理化展覧会っていうのが松山で、子どもの時にありましてね…「自由学園の一日」というビデオがあったんですよ。それを毎日見ていて、生徒がいろいろ自治的にやるのが出てましてね。それで私、自由学園に行きたかったんです。ずーっと。でも父が自由学園はあんまり許してくれなくてね。…一番よく勉強したのが、アメリカ文化センターっていうのが（静岡に）ありましたね。…そこでアメリカのChild EducationとかNursery schoolとか、幼児教育関係の参考書が一杯ありましてね、そこで随分勉強しました。…だから師範学校の附属幼稚園にいても、そこだけでなくて、そういう元自由学園のこととか、アメリカの幼児教育のことなんかを勉強してたことが、多分、他の人とちょっと違うことになった原因かもしれませんね。

一方吉村は、公立園でありながら、自身が園長になるまでは、東京都公立保育園研究会に出る機会を与えられなかったという。吉村は、そこで鈴木とくと出会い、研究的な保育にのめり込んでいく。鈴木とくは、保母と母親の協働という現代の子育て支援の先駆け的な活動を試行した東京帝大セツルメント託児部を出発点として、東京都の研究的な保育を牽引した人物であり、吉村が出会った当時は東京都公立保育園研究会の顧問であった。

Ｙ：私がね、とく先生と会ったのは、都立の保育園の、保育園に研究会が出来て、そこの研究委員に。うちの園長先生が辞められた後ですね、研究会に出たのは。初めて23区全部の大きな研究会です、その当時3000人いましたから。…ええ、あんなに面白い人はないんです。音楽の話をしてもねえ、作家の話をしても、今出た新刊書の話をしても、絵本の話をしてもね、それから展覧会の話をしてもね、それで修辞学も。

吉村は鈴木とくと共に研究活動を行うだけに留まらず、個人的にも趣味が合い、食事をし、語り合ったという。吉村は、鈴木の幅広い教養に裏打ちされた、理念をもって保育を創造する姿勢に共感を抱いたことだろう。吉村が東京都立保育園の保母時代に東京都公立保育園研究会の研究副部長として調査した研究成果は、平成２年の保育所保育指針作成に取り入れられている。

５．まとめと考察

山崎（1995）は、ライフコースには「個人時間（加齢・成熟に伴う）」「社会時間（家族や職業に関する）」「歴史的時間（時代背景）」の３つの時間が束ねられていると捉え、この３つの視点から教師が力量を形成する道筋を分析している[9]。それに則って２人のライフコースを見てみると、２人の「個人時間」を特徴づけていることとしては、女学校での、「学び」についての考えが根底から覆るような経験がある。また強く印象に残った体験として、戦争で価値観が変わった際の周囲の大人たちの信念を貫く行動を目に焼き付けたこともある。２人が元々

持っていた能力や性格に加えて、これらの要因が、周りを頼れない状況下にあっても、或いは孤立無援の状況にあってさえ、自力で学び進め、保育を構想、創造していく契機となったのであろう。次の「社会時間」については、両名とも女性の自立に理解のある文化的な家庭で育ったことに加え、語りに表れてはいないが、背景には女性が働き続けることを応援する家族、戦争で焼け出された際に身を寄せた親戚等、支えてくれた周囲の人々の存在があった。吉村の場合は、就職の際に通っていた八王子の教会の牧師が保証人になってくれたとのことである。これらの人々の途切れない支援が２人のキャリア形成を後押ししていたのであろう。その一方で、職場に於いては、対立的な人間関係に陥ったり、頼れる仲間がいなかったり、と理解者に恵まれないこともあったが、それがまた新しく進む原動力にもなった。藤野は社会人として大学に入学し、吉村は鈴木とくらの研究会に仲間を求め、更に保育の幅を広げることになる。「歴史時間」の面では、戦争による生活の激変、そしてクリスチャンであった２人にとっては特にキリスト教の弾圧があったことを抜きには語れないであろう。２人とも、保育と出会ったのは偶然だったと口にしているが、戦争で焼け出され、生きていくために何かをして働こうという時に、ふとしたきっかけで巡り合ったのが「保育」だったが、それが他の要素と相まって、いつしか一生をかけた仕事となっていったのである。

以上のような３つの時間が撚り合わされたことにより次のような姿勢が生まれた。

○　自分で保育を考えつくる

２人が高等女学校英語科を卒業した後に保育を志し、資格を取得して保育者となったことは当時としては特別なことではなかったが、そのため働きながら資格を取得すると同時に向学心に燃えて書物を読み、研究会に参加することで保育の探究をすることとなった。この時、学びの支えになったのが、高等女学校で知った「学び」に向かう姿勢であり、働き続けることの支えになったのが家族や仲間だった。仲間は時には反面教師的な役割も果たすが、それでもそこで辞めることをしなかったのは、そうせざるを得なかった時代背景があったにせよ、働くことで家族を支えるという強い自覚であった。そのような条件の下育った「自分で考えなくては」「自分がやらなくては」という自発性、能動性に満ちた姿勢が専門性を向上させるため、たゆまぬ自己研鑽に努める態度に繋がったと考えられる。

○　信念に基づいて行動する

特に山崎のいう「個人時間」の部分で出会った、信念を体現して生きた人々の姿勢、またその信念の表現の仕方は、藤野、吉村それぞれにショッキングな体験として強く記憶に刻まれている。感受性が豊かな時期に、身近な人が信念に基づいて行動する姿を目の当たりにした経験は、その後２人が、時代に流されずゆるぎない保育観をもち続ける土台になっていった。

これらの姿勢が、自身の信じる保育を創造し、追求し続ける原動力となり、神長のいう「自ら学ぶ姿勢をもって研鑽を重ね、その専門性を磨く」ことに繋がったのだろう。吉村は「後になって考えると、知識も経験もほとんどないまま現場に入ったのは幸いだったと思うのです。なぜなら、何の先入観も予備知識もないので『本日の活動のねらい』や〔保育上の配慮〕などにとらわれることなく一緒に遊び、生活上の世話をすることができたからです。…立場はいつも対等であったような気がします。」[10]と振り返る。吉村も藤野も共に、理論より先に実践の世界にまずは飛び込み、自分なりの方法で、子どもと共に生活する中で「実践的専門性」「反省的専門性」を身に付けてきた。吉村が「無軌道で矛盾だらけのスタート」と呼ぶこの状況が、虚心で子どもと向かい合う姿勢を生み出し、ねらいを立てて行う保育計画の遂行にとらわれなかったことが、逆に子どもと共に創り出す保育に繋がったのである。しかしその背景には膨大な量の自学があり、それを支えたものは、学びとは「自分から選び」、「視点を変えて考え」「様々な方法で表現する」ものだと強烈に印象付けられた高等女学校での経験であった。昭和20年代の、まだ保育者養成課程が十分整っていなかった時代に、これらにより培った力を基に２人は「理論的専門性」を築いていく。また共に切磋琢磨し合い、時に対立もした同僚との経験はまた「関係構築的専門性」の基盤ともなった。２人は学校時代に身に付けた学び方を元に自主的に学び、仲間から様々な影響を受けながら、理想の保育を探究しキャリアを形成してきた。時代背景は違うものの、この２人が辿ってきた道の中に保育者の専門性醸成の手がかりがある。今後も更にこの時代の保育者のキャリア形成を元に、保育者の専門性を高めてい

く要素を明らかにしたい。

【文献】

1　神長美津子（2015）展望　専門職としての保育者. 保育学研究．第53巻第１号．96-99
2　Ivor F. Goodson and Pat Sikes（2006）ライフヒストリーの教育学　実践から方法論まで.（高井良健一・山田浩之・藤井泰・白松賢訳）昭和堂．84 （Ivor F. Goodson　and Pat Sikes（2001）Life History Research in Education Settings, Open University Press.）
3　やまだようこ（2000）人生を物語ることの意味―なぜライフストーリー研究か―. 教育心理学年報. 2000. 39. 152
4　桜井厚（2012）ライフストーリー論．弘文堂．9-23
5　宮内孝（1976）幼稚園の教職員―戦前―. 水野浩志・久保いと・民秋言編著．保育者と保育者養成．戦後50年史第３巻．日本図書センター．19
6　文部省（1979）幼稚園教育百年史．ひかりのくに．165-221
7　水野浩志（1975）終戦後の保姆養成の姿．遠藤明子・岡田正章・宍戸健夫・水野浩志・村山貞雄著．日本幼児保育史第６巻．日本図書センター．159-161
8　副島ハマ（1949）保母さん方への実態調査（一）（二）（三）, 湯川嘉津美　解説．復刻版『保育』戦後編Ⅰ1946-1955　第４巻．日本図書センター．第3-5號
9　山崎準二（1995）教師のライフコース研究―モノグラフ：女性教師の場合-．静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第45号．156-159
10　吉村真理子（2007）保育の原点を体得する．保育者になったころ（１）．幼児の教育．106巻４号．日本幼稚園協会．フレーベル館．44-49

【付記】

藤野敬子氏インタビューに関しては、平成21年度常葉学園短期大学教員研究奨励制度研究助成を受けている。

【謝辞】

吉村真理子氏インタビューに際しては、学校法人東雲学園理事長小西靖洋様、児嶋雅典教授を始め、多くの方々のご厚意を受け、多くの資料を提供していただきました。ここに深く感謝申し上げます。